

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立アイヌ民族博物館でのビーズ展（2021年10月2日：12月5日）＜基幹研究：北東アジア地域研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009953

国立アイヌ民族博物館でのビーズ展 (2021年10月2日-12月5日)

池谷 和信

展示の背景

2020年の秋のある日のこと。北海道白老町に位置する国立アイヌ民族博物館（以下、アイヌ博）の職員から私のところに電話がきた。2017年春に民博で開催された特別展示「ビーズ一つなぐ、かざる、みせる」をアイヌ博に巡回できないかという話である。私は、即座にそのまま同じものをやってみようがない。アイヌ博のスタッフが独自の力で新たなビーズ展をつくりあげたらどうかと言ったのを覚えている。しかしながら、開催予定日までの準備期間があまりない、アイヌ博は開館したばかりで展示の経験が少ないなどの理由で、民博で開催された展示を巡回させることにそのときは決まった。

しかし、その後、話し合いを進めるなかでアイヌ博側から民博と同じ内容のビーズ展では困るという意見が出た。アイヌ博の常設展示の展示内容との差異化も必要になったからだ。こうして両者が協働して新たな展示をつくることになった。以下では、この展示がどのようにしてつくられたのか、その準備過程で生じた問題は何であったのかを示し、複数の国立博物館が協働して展示をつくりあげることの難しさとともに、そのことの意義について述べてみたい。



マネキンで見る世界のビーズ（2021年、筆者撮影）

新たなビーズ展の誕生

2021年1月、コロナ禍のために民博とアイヌ博との協議はオンラインにより開始された。その内容の詳細は割愛するが、時には意見の食い違いがあったのを話し合いによって乗り越え、新たな展示アイデアがうまれた成果があった。とく

に、アイヌ博の提案をいかに展示に組み込むのかは困難だったが、民博側が訪問できずアイヌ博の特別展示場（1000平方メートル）をみていなかったことが食い違いをうむ原因にもなっていた。

そこで2021年3月7日にはじめて、展示の共催となる千里文化財団のスタッフとアイヌ博に行くことができた。そして、展示場の天井は数メートルと高く、壁には備え付けの大きなガラスケースが置かれていた。はじめて民博の展示場との違いを私は実感できた。たしかに展示資料が仏像の場合にはよいが、小さいビーズには向いていないようにみえた。しかし、上方部のガラスケースを隠すという演示方法が導入されたことで、その点はある程度解決できた。

また、アイヌ博に所蔵されていた数多くのアイヌの首飾り（タマサイヤシトキ）には、民博のものと同様に個々の入手情報がほとんどない。このため、展示には欠かせないアイヌのビーズについては、最後まで資料の選定に悩まされた。最終的には、資料の年代と使用地がわかるもののみを展示することになった。

もっとも画期的であったのは、今回の準備過程で副題を「アイヌモシリから世界へ」と変更したことである。特別展示場は「ビーズとは何か」、「多様な素材」、「歩み」、「つくる」、「ビーズとくらし（映像のみ）」、「ビーズで世界一周」、「グローバル時代のビーズ」（図1参照）という7つのコーナーに分割された。各コーナーには北海道やアイヌにかかわるものが各展示コーナーの導入部に配置された。

この変更は、これまでの民博・ビーズ展の部分構成を変えることにとどまらず、自分の考えの変更をしいられた。たとえば、「歩み」のコーナーでは、道内の先史時代の玉が必要になった。そのため、アイヌ博側が道内をかけまわって遺跡から出土した玉を借用した。その結果、道内ではじめて旧石器時代から江戸時代までの北海道の玉が一堂に集められたことになる。一方、そのため「ビーズで世界一周」のコーナーでは、これまでオセアニアのビーズから始めることにしていた演示をアイヌのビーズからにした。

さらに、今回の展示の目玉である「グローバル時代のビーズ」のコーナーでは、アイヌの作家によるビーズ作品、アイヌの家族に伝承されてきたビーズなどが展示され、アイヌ自らが参加するコーナーができた。こうして、これまでの民博のビーズ展にはない新しい成果の形になった。

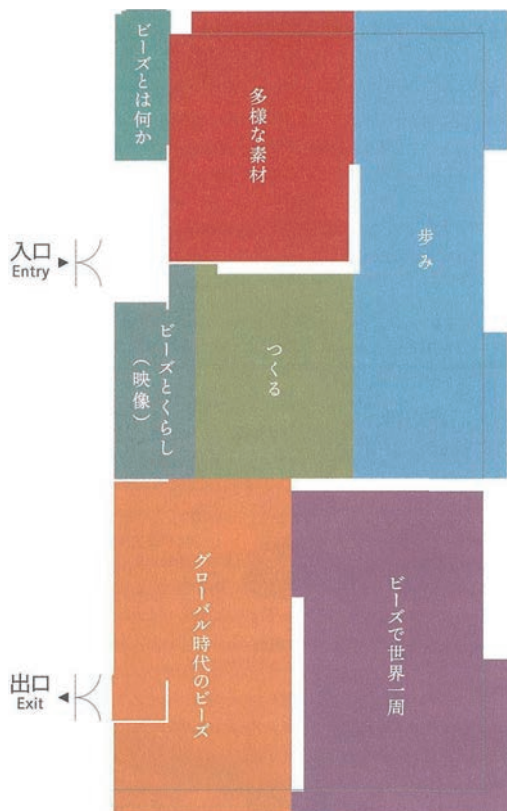


図1 展示の空間構成（国立アイヌ民族博物館 2021）

展示にかかわるセミナーやイベント

コロナ禍の影響により展示の始まりは2週間、遅れた。これにともない、予定されていた5回のセミナーの日程は変更されたものの、すべて実施できた意義は大きい。全国から研究者や関係者を招いて北海道のビーズの歴史、アイヌのビーズについて正面から議論をすることができたからである。5回のセミナーでは、3つの枠組みを設定して議論を深めた。

第1は、先史時代から現在までの歴史的な枠組みである。現在のアイヌのビーズは、いつごろからどのような過程を経て生まれたのか、とくにシトキの特徴となる部分の誕生の経緯などについて、これまでの知見をまとめ、新たな展開について議論できた。

第2は、北海道とその隣接地域のビーズを北方地域や東アジアのなかで位置づける試みである。なかでもアイヌとロシアの先住民コリヤーク、アイヌと北アメリカ先住民のビーズ文化の比較によってアイヌのビーズ文化の特性を抽出することができた。

最後は、人類にとってのビーズを問う試みである。ビーズは、アフリカや南米はもちろん世界の諸民族のあいだで用いられている。しかも、単なる装飾品としてのみならず母親から娘へ譲渡されたり、社会のなかでの威信財になったりと多様な役割を担っている。このような世界のビーズ文化の視点からはじめて北海道やアイヌのビーズの特性や普遍性を理解することができた。

これらの成果は、2022年3月末に刊行された『アイヌのビーズ—美と祈りの2万年』（平凡社）として結実した。この本にはカラー写真によるビーズの紹介が80頁前後含まれていて、アイヌのビーズ文化の魅力を存分に伝えているので、

池谷 和信（いけや かずのぶ）

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は環境人類学、人文地理学。著書に『トナカイの大地、クジラの海の民族誌—ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ』（明石書店 2022年）、『人間にとってスイカとは何か—カラハリ狩猟民と考える』（臨川書店 2014年）などがある。

多くの読者の方に読んでもらいたい。

ビーズ展をめぐる成果と課題

今回のアイヌ博でのビーズ展（2021年10月2日-12月5日）は、2017年春の民博でのビーズ展の巡回展のひとつではあった。とはいえ、アイヌモシリから世界へという基本テーマに設定しなおし、アイヌ博と民博とが協働しあって新たなかたちの展示を創造することができた。民博でのビーズ展の観覧者が「ビーズ展が進化している」と言ってくれたことは印象に残っている。しかしながら、この展示の過程やその内容については問題点も数多くあった。

まずは、わかりやすく来館者に展示の主旨と主張が伝えられたかどうかについてはアンケートの結果から反省点がうかがえた。

つぎに、コロナ禍でのオンライン会議のあり方である。すでに述べたように、2021年3月7日、6月22日、8月21日の3回にわたる会議では、対面の重要性を感じた。少なくとも今後は双方の方法の組み合わせが欠かせないであろう。

さらに、今回の展示の民博にとっての意義についてである。展示の最後の部分に設けられた民博の紹介コーナーで、民博をはじめて知った方もいたことであろうが、展示期間中に民博の人文知コミュニケーター神野知恵さんのサポートによって展示の中身を民博YouTubeで発信できた広報面での意義は大きい。しかしながら、民博の巡回展が、民博広報にとってどのような意味を持つのか、新たな広報の方法を探ることが求められている。

最後に、ビーズ展終了後、上述の『アイヌのビーズ』（池谷 2022）という単行本を刊行できた点である。この本には、展示中に開催されたセミナーの成果内容が反映されている。今回の展示では、民博の展示の基本枠組みを活かしながらも共催する相手の枠組みも新たに組み入れ協働した結果、展示前の私の認識を大きく前進させる成果物の刊行に至ることができた。その意味で、今後の巡回展のひとつのモデルを提示できたと考えている。

引用文献

池谷和信編 2022『アイヌのビーズ—美と祈りの2万年』東京：平凡社。
国立アイヌ民族博物館 2021 第3回特別展示『ビーズ—アイヌモシリから世界へ』（リーフレット）。